

☑ *Short Story* 005-057

☑ *Novelette* 058-093

アイヤーリキュール 058

惚れ薬はいかが？ 067

眼鏡を買いに 075

日付は七月二十八日、 084

☑ *Novel* 094-213

夜咄、辺境にて 094

アイネクライネ 132

三文芝居、あるいはある愛の病について 180

ワルター・フォン・シェーンコップ准将がお見えです。

部下からの連絡に、アレックス・キャゼルヌ少将は小首を傾げつつも「分かった、通してくれ」と答えた。

ほどなく、知らされた通りの人物がキャゼルヌの執務室に現れ、優雅に敬礼を施した。

「ワルター・フォン・シェーンコップ准将、参りました」

「ああ。悪いが、何か約束をしていたか？」

シェーンコップが来るまでの数分に記憶を探りもしたが、さて何の用件があったか、まったく心当たりがなかった。

やや申し訳なさそうなキャゼルヌに、シェーンコップは朗らかに笑う。

「お約束はいただいております。アポイントメントは必須で？」

「そうは言わんが……」

ではなおさら、いったい何の用があるろう。キャゼルヌの疑問に、シェーンコップは焦らすことなく解を示した。

「いや、こちらなのですがね」

「？」

シェーンコップが手に示したものは、キャゼルヌには見慣れたものであった。彼自身、身につけているもの。将官となった者が首元に装うスカーフだ。

「それがどうかしたかね」

「何しろご縁がなかったもので、着こなしがよく分からんのです。そこで、ぜひキャゼルヌ少将にご教示をいただきたく、参った次第です」

「そんなことのために、わざわざ来たのか？」

「そんなこととおっしゃるが、こういった小物ひとつで見た目というものは大いに変わるものですよ。小官としては、女性に笑われるような格好は死んでもごめんなのでね」

「分かったわかった」

苦笑して息を吐き、キャゼルヌは椅子から立ち上がって、シェーンコップの前に歩んだ。

何が彼をそうさせるのか、シェーンコップはやけに満足そうにキャゼルヌを見つめる。

「どれ、貸してごらん」

シェーンコップは差し出された手に素直に真新しいスカーフを渡し、その手の行方を見守った。

「何も私なんぞに頼まなくとも、貴官なら喜んでやってくれる女性が大勢いるだろうに」

物好きなことだ、と笑うキャゼルヌの手によって、シェーンコップの首元が白いスカーフに彩られる。

「そら、できたぞ」

「なるほど」

「覚えたか？」

「いえまったく」

「少し早かったか？ もう一度、ゆっくりやろう」

言って、キャゼルヌの指がしゅるりとスカーフを外していく。

「いいか？ まず」

ここをこうして、ここをこうするんだ。子供に説明するような丁寧さで、キャゼルヌがスカーフを扱う。

「ほら、できあがりだ。どうだ？」

二度目完成させて視線を上げると、触れそうなほど近くに端整な顔があり、キャゼルヌはぎよつとしてややのけぞった。

「すまん、こんなに近づいていたか」

「なに、問題はありませんよ。おかげさまで、分かったような気がします」

「そうか、それは良かったな」

「試してみてもよろしいかな」

「？ 好きにするといい」

何故許可を求めたりするのか不思議そうなキャゼルヌに、シェーンコップはふつと笑い、では失礼して、と己ではなくキャゼルヌの首元に手を伸ばした。

「っ!? おい！」

驚いたキャゼルヌの体がつさに逃げを打って一歩下がったが、それが限界であった。

「動かない方が良い。首を絞めてしまえますぞ」

「……お前さんに言われると、身が竦むな」

白兵戦の達人であるシェーンコップの言葉に、キャゼルヌはやれやれと諦めたように息を吐き、シェーンコップの手に身を委ねた。

しゅるりしゅるり、先ほどまで自分がそうしていた時はまったく気にならなかったのに、何故かやたらと音が耳につく。

「……まだかね」

「もう少しですよ」

「……」

なんとも居心地が悪い。しかし、何故こうも居心地が悪いと感じるのだろうか。後輩のヤン・ウェンリーとでさえ、これほど至近に見合つたことなどない距離で接しているからだろうか。

ああ、いや。そういうヤンが昇進した時も、スカーフの結い方を教えてやったかな。

「ッ」

などと考えていると、一瞬呼吸ができなくなった。

それは本当に一瞬のことで、すぐにまた肺に酸素を送りこめたが、キャゼルヌはその一瞬の理由を問うように、眼鏡の奥の目を陰しくしてシェーンコップを見た。

「失礼。力加減を間違えたようだ」

「……」

とても謝っているように聞こえないシェーンコップの言葉に、キャゼルヌは無言で睨むばかりだが、シェーンコップはそのような視線は痛くもかゆくもなさそうに、キャゼルヌのスカーフをもてあそぶ。

「今、何をお考えでした？」

「貴官には関係のないことだ」

「つれないことだ。教えてくださってもよろしいではありませんか」

笑いを含んだ声音が不快で、キャゼルヌの表情がますます陰しくなる。

「お前さん、おれを怒らせるためにこんなことをしているのか？」

「これは心外。わたしは、キャゼルヌ少将ともっと仲良くなり

□ 惚れ葉はいかが？

「惚れ葉、ねえ」

行儀悪く頬杖をつき、渡された小瓶を振って、イゼルローン要塞の要塞司令官ヤン・ウェンリー大將はその小瓶を持って来た相手、士官学校時代からの後輩でもある要塞駐留艦隊分艦隊司令官の一人ダステイ・アッテンボロー少將を見る。

アッテンボローは興味のなさそうなヤンに笑って、ひょいと肩をすくめる。

「まあ偽物でしょうけどね。面白そうなので、ちよつと分けてもらいました」

「出どころは？」

「フェザーンです。最近流行ってるらしいですよ」

「そいつは、平和で結構なことだね」

ヤンが笑って小瓶をデスクに置くと、それを取り上げる武人の手があった。

「飲むとどうなるの？」

「なんでも、飲んで最初に見た相手に惚れるらしい。効果は三日くらい、だったかな」

「なんだ。三日過ぎると、好きじゃなくなってしまうのかい」
「だから流行ってるんですよ、遊びつてことで。成分も、体に

悪影響の残るものは使われてないから、安心なんですって」

「なるほど。確かに、三日程度なら後腐れもないでしょうな」

小瓶をライトにかざして見る要塞防衛指揮官ワルター・フオン・シェーンコップ准将に、アッテンボローが眉を上げる。

「興味があるのか、シェーンコップ准将」

「なくはないですな」

「意外だな。貴官なら、こんな小細工をしなくても惚れさせる自信があるんじゃないか？」

「まあ、否定はしませんがね」

「でも三日だろう？　むなしくなるだけだと思うけどねえ」

頬杖をやめ、ベレー帽を指に引っ掛けてクルクル回しながらそう言うヤンに、アッテンボローが親しく笑う。

「ヤン先輩って、意外と繊細なんですね」

「私ほど繊細な男はそういないよ」

「繊細な男ならば、もう少しくらい提出期限を守っていただきたいものだがね、要塞司令官どの」

「あ、キャゼル又先輩」

中央指令室に転がり込んできた声にヤンが首を縮め、アッテンボローが声の方を振り向いた瞬間、パキリと瓶の蓋が開けられる音がした。小さなその音に、ヤンもアッテンボローも、やってきた要塞事務監アレックス・キャゼル又少將も気づかなかつたが。

キャゼル又は要塞司令官のデスク前まで歩むと、抱えるようにして持ってきた書類をどきりとデスクに置く。

「ゼーんぶ、今日中の提出だと言っておいたはずだぞ。ヤン・

ウェンリー」

「今日はまだ終わってませんよ、キャゼルヌ先輩」

「これだけのサインが今日中にできると？」

「やる気を出せば、たぶん」

「ではぜひ出してもらいたいね、そのやる気を」

「あいにく今、留守にしています」

「ほう。いつ帰ってくる予定だ？」

「三日後かなあ」

「ではそれまで、やる気の主人に手を動かしてもら」

おうか、とヤンに伸ばしたキャゼルヌの腕が横から伸びてきた大きな手に掴まれ、キャゼルヌの体はくると横に向かされてしまった。

「な、なんだ」

驚いて向かされた先を見れば、何故か閉じられていた相手の目がゆくりと開かれ、グレーがかったブラウンの目がまっすぐにキャゼルヌを見る。

その間にヤンとアッテンボローが目を見合わせたが、キャゼルヌはそれには気づかなかった。

「シェーンコップ准将？」

どうした、と不思議そうなキャゼルヌを見て、シェーンコップがふっと笑む。

それにドキリとしてしまったのは、この男がむやみやたらと整った顔をしているせいだそうに違いない。原因を相手に丸投げすることで、キャゼルヌは平静を装った。

シェーンコップはそんなキャゼルヌの内心を知って知らず

か、腕を掴んでいた手を滑らせ、無警戒なキャゼルヌの頬をすりとなでると、少しかさついていいる唇を親指でなぞる。

「ッ、おい？」

「惚れました」

「はっ？」

なんて？

「おい、どうした。頭でも打ったのか？」

大丈夫か、とこの状況においても相手の心配をするキャゼルヌに、シェーンコップは偽りなく微笑んでキャゼルヌの手を取り、恭しく甲に口づける。

「キャゼルヌ少将。おれはあなたに惚れてしまったようだ」

「は」

はああああ!!?!?

キャゼルヌのその声は、中央指令室だけに留まらずイゼローン要塞中に響いたとか、なんとか。

両手で耳をふさいでその大声をやり過ぎたヤンは、隣で同じ格好をしているアッテンボローに身を寄せ、こそりと言う。

「飲んだね」

「飲みましたね」

頷きあう後輩たちの視線の先では、同盟軍随一の伊達男に迫られてたじたじになっている敬愛すべき先輩の珍しい姿が見られた。

□ 夜咄、辺境にて

アムリッツア会戦における補給計画の失敗の責任をとらされ、第十四補給基地へと左遷されたアレックス・キャゼルヌ少将は、周囲が思うほど悲観してはいなかった。

当の本人は、これではばくはゆつくりできるだろう、くらいの軽い気持ちだ。

単身赴任を決めたため、妻や娘たちと毎日会えなくなるのはさみしいが、永遠に会えないわけではない。休暇には帰ることも、こちらへ呼んでやることだってできるはずだ。

そして左遷が決まったことを夫から聞いた妻がこそ、家族の再会は早いと予見してみせた。

——ヤンさんが人事権を得たのなら、あなたを手離すわけがないもの。あなたが面倒を見始めたのですから、きちんと最後までお世話なさってくださいね。

まるで犬猫でも拾ってきたかの言われように、キャゼルヌは苦笑するしかなかった。

ワン・ウエンリーあるいはニヤン・ウエンリーは、キャゼルヌの左遷が決まったことを知るや、似合わない仏頂面でキャゼルヌの元を訪れ、執務机の下の空間に籠城してみせた。

しかしそんなことをしたところで決定されたことが覆るはず

もなく、たまたま昇進の報告にきたアッテンボローによって引きずり出され、ヤンはしぶしぶ「お氣をつけて」とキャゼルヌを見送った。

そうして遠く五百光年をへだてた辺境へとやってきたキャゼルヌは、まず宿舎へ向かうのではなく、職場となる司令部へと足を運んだ。

勤務は明日からの予定になっていたが、予定よりも早く到着したので挨拶くらい済ませておこうかと、軽く考えたのだが。司令官として着任するような将官がひよこりと、居酒屋でも覗くかのようにやってきたことに、司令部に勤務する者たちは慌てた。着任は明日だと思っていたのだから無理もないだろう。たとえキャゼルヌがそんな大仰な歓迎を期待も望みもしていないとしても。

「ああ、氣をつかわなくていい。氣にせず仕事を続けてくれ」などと言われても、氣にはなるし氣もつかう。

受付から連絡をもらった、キャゼルヌの補佐を務める予定の人物が息を切らして駆けつけ敬礼をするが、その肩が激しく上下している。

「お、おま、おまち、し、んぐ」

「おいおい、大丈夫か？ ちようど口をつけていない水を持ってるんだ。そら、飲みなさい」

キャゼルヌは手荷物の中から水のボトルを取り出し、相手はありがたく拝むようにそれを受け取ると一息に半分は飲んだ。

「はっ、んぐつぐつ、ぐつ」

「良い飲みっぷりだなあ」

「ぶはっ。し、失礼しました。改めまして、閣下の補佐を務めさせていただきます、ゲオルク・アロフス大尉であります」

改めて敬礼をして名乗るアロフスに、キャゼルヌも笑って敬礼を返してやる。

「アレックス・キャゼルヌ少将だ。予定より早く着いたので軽い挨拶と荷ほどきでもしておこうかと思っただが、かえって迷惑をかけてしまったな。すまない」

「いえそんな！ 閣下がいらつしやると決まって以来、小官は眠れぬ夜を過ごしております！」

若き士官は緊張のあまり、自分の言葉が相手にどう聞こえるかまで気がまわっていないらしい。おそらくは、お会いできるのが楽しみで夜も眠れぬほどでした、とても伝えたいのだろうが。

彼の言葉に悪意がないことは目に見えていたので、キャゼルヌも腹を立てることはなかった。

「ははっ、そいつは悪いことをしたなあ。今日からはゆつくり寝てくれ。さて、さっそくで悪いが、私の荷物はもう届いているか？ 案内を頼みたい」

「はっ！ ご案内いたします！」

ではさっそく、と何故か走り出したアロフスに、おいおい、おれはお前さんほど若くはないんだぞ、と思うがそれを伝えようにもまず彼に追いつかねばならず、キャゼルヌは思わぬところで体力を消耗することとなった。

「こちらが閣下のお部屋で、あれ」

「はあ、はあ。ああ、うん」

「あの、キャゼルヌ少将。どうなさいました？」

「いや……、はあ。貴官は、ずいぶん足が速いな。結構なこのだが、私と一緒に歩けるだけ、歩いてもらえると、ありがたい」

「あつ！ こ、これは失礼いたしました」

「まあ、いい運動に、なったよ。その水、もらってもいいかね」

「はい！ どうぞ!!」

先刻キャゼルヌからもらった水を、さも自分の物を差し出すように言うアロフスに苦笑して礼を言い、水のボトルを受け取りありがたく飲む。

「ふう。さて、中に入ろうか」

「はい」

アロフスがカードキーでドアを開け、キャゼルヌを中に促す。キャゼルヌの新たな執務室は、さほど広くはないようだ。キャゼルヌはぐると部屋を見回して、大きくはないデスクに目を向けて笑った。このサイズでは、足元にヤンを入れてやることはできないな、などと思う。

「閣下？」

「ん、いやすまん、なんでもない。案内してくれて助かったよ。貴官にも今日の仕事があるだろう、もう戻ってくれていいぞ。急にきて、迷惑をかけてしまって悪かったな」

「いえ。あの、小官もお手伝いします」

「大丈夫だ、お手伝いしてもらおうほどの量じゃないさ。ありが

とう、アロフス大尉」

「……」

札を言つてジャケットを脱ぐキャゼルヌを、アロフスはほけりとする。そんなアロフスに気づき、キャゼルヌは首を傾げた。

「ん？ どうした」

「あつ、いえ。では、小官はこれで失礼いたします」

「ああ、ありがとう。おっと、大事なことを忘れるところだった、大尉」

敬礼をするアロフスに敬礼を返して見送ろうとしたキャゼルヌだったが、あることを思い出して手を差し出す。

「？ 何でしょう？」

アロフスは今度はきよんととしてその手を見て、キャゼルヌを見る。

「鍵だ、この鍵を渡してもらえんかね。それとも、私が来る時も帰る時も、貴官がお供してくれるのかな？」

「あつ、失礼いたしました！」

こちらです、と先ほどのカードキーをキャゼルヌに渡して、アロフスは改めて敬礼した。

「で、では、小官はこれで！」

「ああ、ありがとう。また明日からよろしく頼むよ」

「はい！」

元気に返事をする新しい若き部下を見送って、キャゼルヌはカードキーをデスクに置くと、さてと、とコンテナの開梱を始めた。

しばらく一人で黙々と作業をしていると、控えめなノックの音が部屋に響いた。

「ん？」

「あの、失礼いたします。キャセ、キャゼルヌ少将」

おずおず顔を出したのは女性士官で、まだ呼び慣れないキャゼルヌの名を言い直して敬礼する。

「どうした？」

「お客様が、いらしてます」

「客？ 私にか」

驚くキャゼルヌに、その反応を見てどうやら約束していない相手らしいと察した女性士官が領きつつ伺う。

「はい……。改めていただいたほうが、よろしいでしょうか？」

「いや、会っただけ会ってみるよ。案内してもらえるかな」

「かしこまりました」

少し前にキャゼルヌが初めて入ってきたエントランスには、軽い人だかりができていた。顔を上げて見れば、二階通路あたりからもこちらを見ている者たちがいるようだ。それも、女性ばかり。

「……」

「あちらのお方です、閣下」

客人は女性に連れられてやってきたキャゼルヌにすぐに気づき、優雅に座っていたソファから立ち上がると敬礼をしてふつと笑みを浮かべる。その一連の流れるような洗練された所作に、

あちこちで華やかな声があがった。

「シェーンコップ准将か……」

女性陣の作る遠巻きながらも散らない人ばかりを見たときから、キャゼルヌにはなんとなく予想できた人物であった。

キャゼルヌが案内をしてくれた女性士官に礼を言っている間に、やはり洗練された動きで足を進めたシェーンコップがキャゼルヌに近づき改めて敬礼をする。

「お久しぶりですかな、キャゼルヌ少将」

「五日ぶりの再会を貴官が久しぶりと思うのなら、そうなのだろうさ」

苦笑してそう言い、答礼をして手を下げ、少し首を傾げる。

「私は何か、処理を残していた仕事があったか？」

「お心当たりでも？」

「ないから聞いているんだ。貴官がわざわざやって来るなど、理由がなければありえんだろう」

「理由ですか」

ふつと細められたシェーンコップの目が、この場での説明をやりわりと拒む。

「まあ、立ち話もなんだ。私の部屋で話を聞こう」

キャゼルヌは軽く顎を引いて、シェーンコップを自分の執務室へと導いた。

「散らかっていてすまんね」

言いながらソファに投げっていた書類のファイルを棚に移動さ

せるキャゼルヌに、シェーンコップはしげしげと部屋を見回しと言う。

「お手伝いしましょうか」

「いや、それより、わざわざ来てくれた理由を聞かせてもらいたい」

まあ座れ、とソファを示すキャゼルヌに、シェーンコップは遠慮せずソファに座り、長い足を組んだ。

「実は小官は今、上官に倣いバカンスを満喫しているところですよ」

「バカンス？ このあたりがバカンスに適しているとは、知らなかったな」

「という建前で」

キャゼルヌはシェーンコップの声を横に聞きながら、棚に移動させたファイルを立て置いてみて、やや首を傾げる。ここではちと場所が悪いかなんてことを思っているキャゼルヌの耳に、シェーンコップの本音が告げられた。

「キャゼルヌ少将。あなたに会いに来たのです」

思いもしなかった言葉に素直に驚いて棚からシェーンコップへと向き直り、慎重に確認する。

「会いに来た？ おれに？」

「はい」

「お前さんが？」

「ええ」

まったくもって不思議で仕方ない様子のキャゼルヌを見て、シェーンコップはくすりと笑う。

「ずいぶんと驚いておいでのようだ」

「そりゃあ、驚くだろう」

ヤンのようにかしこし頭をかくキャゼルヌにもう一度笑い、シェーンコップは本心から言う。

「一度、あなたとゆつくり話をしてみたいと。ずっと思っていたのですよ」

「話、ねえ……」

キャゼルヌは頭をかいていた手を滑らせて首をさすり、やがて小さく息を吐いた。

「まあ、私も話し相手がいてくれるのはありがたい。しかし、なにしろ今朝こちらに着いたばかりでな、うまい店も知らんし、右も左も分からん。ろくに案内もしてやれんが」

「かまいませんよ。行くあてもやることもなければ、閣下の宿舍の片付けでもお手伝いしましょう」

「そいつは助かるが、いいのかね？」

「はい？」

何がです？ と首を傾げるシェーンコップに、キャゼルヌはニヤリとする。

「せつかくの休暇を無為に過ごすことになったとしても、消化した休暇は戻って来んぞ」

キャゼルヌの言葉に、シェーンコップはぱちくり瞬きをしてからふつと笑った。

「ご心配なく、有意義な休暇にするつもりですから」

執務室の片付けを一段落させ、キャゼルヌは宿舍に向かうことにした。その旨を連絡しようとデスクの通信端末に手を伸ばして、内線番号が分からないことに気づき端末には触れず、カードキーを手に取る。

「待たせたな、そろそろ行くとしよう」

そう言ってソファでくつろいでいるシェーンコップに声をかけると、シェーンコップは立ち上がりながら返した。

「しばらく席を外しましょうか」

「ん？」

「どこかへ連絡するおつもりだったのでは？」

自分がいるから連絡するのを止めたのではと考えたらしいシェーンコップに、キャゼルヌは笑ってカードキーを持った手を横に振った。

「ああ、違う違う。内線で帰宅を連絡しておこうと思ったんだがな、よく考えたら番号を知らなかった。受付で伝えておいてもらおうとするよ」

「なるほど、それがよろしいでしょうな」

笑って領いたシェーンコップに領き返し、キャゼルヌはシェーンコップを伴って執務室を後にした。

受付にやってくると、女性の視線はキャゼルヌを素通りしてシェーンコップばかりを見つめる。

キャゼルヌはちらりとシェーンコップを見て、シェーンコップはにこりと、女性ではなくキャゼルヌに笑みを向けた。キャゼルヌは肩をすくめて受付に向き直り、指先でカウンターをトントンと叩く。